

あれはそうねえ、三年前の、確か午前五時を回った頃かしら。ラグテイル・ペリオッド様が屋敷から失踪されたのがわかったのは。

もうね、屋敷中大騒ぎだったわよ。なんてったってあの、秀才ラグテイル様が……ご当主様を滅多に困らせたことのない、利発なご息様が、よりによって失踪だなんて。

何があったのかって？ わたしはほら、しがたないメイドにすぎなかったからね、詳しくは知らないわよ。とにかくね、奥様は卒倒なさるわ、ご当主様は顔を真っ赤にして怒鳴り散らすわ、大変だったんだからね。

……ご兄弟？ いらっしやらないわよ。これは内緒だけれど、ご当主様の方に原因があったさうなのよね。だからこそ、一人息子のラグテイル様に一心に期待が集まったんだもの。そりゃあもう、過激なほどにねえ。あれはちよつとおかしいわよ。何でラグテイル様に恋の一つもさせてくれないわけ？

え？ なに、あんた知らないの？ その頃修道院で花嫁修業していたって？ はあ、道理であんた、利口さうな顔してるわ

けだ。いくつだい。……十九？ わっかいねえ。

じゃあ知らない方がいいんじゃないかね。あんなむごいこと、知らなくたっていいよ。あんたはあんたでいい旦那探して、おつかさんを喜ばせてやんな。

なんだって、もういない？

………。

そうかい。あんたも苦労したんだね。

もう誰もいないから、自分がいない間に何があったのか、教えてくれる人がいないってわけか。それで、ラグテイル様失踪のことについて調べてる、と。

あのね、悪いことは言わない。そんなのやめな。

そう嘯みつかないでくれ。私もあんたに教えてやりたいことはたくさんあるけど、あんなおぞましいこと、もう忘れたいんだよ。

どうしても知りたいってんなら、そうだね、私から言っておくから、今は隠居してる元執事様のところへお行き。きつと私より詳しく知ってるからさ。

その息子さんってのも、ペリオッド家の元衛兵だしね。

悪いけど、そろそろ小麦を挽き始めなきやなんないんだ。もう私から教えられることはないよ。

あんた、後悔しても知らないからね。

ほう、それでいらつしやつた。

わかりました、わたくしが知っていることは全てお話ししましょう。あなたにもそれなりのお覚悟があるようですから。

ラグテイル様は奥様にそっくりな、大変麗しい方で、それはもう美しい金髪をお持ちでした。深紅にも思える赤茶色の瞳に絶えず清らかな光をたたえ、嘘と曲がったことを何よりも嫌う、聡明な次期当主様でした。

ペリオッド家のことはご存知ですね？ ……ええ、そうでございます。王妃様の弟の家系で、この辺一帯の土地を治めておいでです。おそらくこの国で、三本の指に入る家系です。

ラグテイル様はその名に恥じぬよう、毎日奥様に見守られながら勉強と修練に励み、素晴らしい青年に成長されました。

ただ、一つだけ……ラグテイル様が、ご当主様を困らせることがありました。平民の女を愛してしまつたのです。

あれはラグテイル様が十六になる年のことでした。この年で初めて、首都に来ることを許されたラグテイル様は、従者と共に馬に乗って、三日間だけ首都に滞在しました。

そのときラグテイル様とユナという女が出会つたのです。

彼女は裕福な家の娘ではありませんでしたが、とてもペリオッド家ご子息の妻になれるような器ではありませんでした。

それなのに、心底ユナに惚れ込んだラグテイル様は、奥様の反対を聞くことなく、結婚を許さぬのならば親子の縁を切るとまで言い出したのです。

屋敷から出たことがなく、数えるほどしか女性を見たことがなかったラグテイル様にとって、ユナはどうしようもなく美しく、可愛らしく見えたことでしょう。確かに笑顔の愛らしい娘でした。

ご当主様は息子の変わりようを嘆き、遂には……。

ラグテイル様はまだ若く、彼女の手を引いてどこまでも逃げていけるようなお力はなかつたのです。

お父上やお母上を納得させることもできなかつたのです。ユナの首が宙を舞うのを、ただ、見ていることしか。

……………申し訳ありません。

この老いぼれ、少しばかり話すぎたようです。今他の者を呼んでまいりますゆえ。

そのう、衛兵の小官にお話できるようなことなど、ございませうでしょうか。お父様に呼ばれているとのことでしたから、こうして参ったのですが。

は、ラグテイル様のお話でございますか。ユナの処刑のときは確かに、小官と数人が畏れ多くもラグテイル様を拘束しておりますが……え、あ、はあ。そうです。

ご当主様が、これはラグテイルに見せねばならんと言って、ラグテイル様を処刑台の前に拘束したのです。

本当によく暴れるものですから、最後には、我々が数人がかりで地面に押し付けているしかなかったのですよ。

運命のめぐり合わせでしょうかね、偶然、処刑台から飛んだユナの首が、ラグテイル様の顔のすぐ前に、ぼちやりと……。

しばらくラグデイル様は、もう微笑むことのないユナの頭と向かい合っておりました。見事な金髪は、そのときから、老人のように色が抜け、白く変色してしまつたのです。

ご当主様がもうよいとおっしゃつたので、我々がラグテイル様の上から退いても、寝そべつたまま、ずっとそうしておりました。

我々がお起こし申し上げようとしても、びくともせず。

ただ、ただユナを見つめていました。

——それはお前の愛すべき女ではないのよ。

奥様がおっしゃいました。

——お前はたぶらかされたのよ、ラグテイル。

答えはありませんでした。仕方なく我々は、ラグテイル様がお心を許す相手、従弟のケイトン様だけを傍に置いて、屋敷に帰りました。

何時間かして、ラグテイル様が帰ってまいりました。

ご当主様と奥様に深く頭を下げ、自らの非を認めたのです。

お二人は大層喜んで、ラグテイル様にますます愛を注ぎ込みました。

その五年後に、ラグテイル様は失踪されるのですけれど。

はあ、こんなものでよろしかったでしょうか。

大丈夫ですか？ お加減が悪いのですか？

いえ、少し顔色が優れないような気がしたもので……はい、わかりました。執事長には小官からお伝えします。

ケイトン様ですか？ お優しい方ですから、誰にでもお会いしてくださると思います。ええ、今の時間なら、ぶどう園にいらっしゃるか。はい。

どうぞお気をつけて。

四

そなた、何者だ。ケイトン様に何か用か。

聞きたいことがあつて来たのだと？ それなら文は送ったのか。ケイトン様はお忙しいお方だ、お前のような庶民に会つてゐる時間は本当なら皆無なんだぞ。それなのにいつもいつも……。

なに、それならば俺でもいい？ なんだ、確かに俺は、長年ケイトン様に仕えているが、学識があるわけではないぞ。

ラグテイル様について、か。ああ、俺もよくしていただいた。細身で美麗、見た目は優男だが、鍛練を惜しまなかった体は下手な傭兵などよりも鍛えられていた。

また、とても頭のいいお方で、俺たちが考えた作戦行動にいつもご助言をくださったよ。それら全てが、とても貴族の息子に考えられるようなものでは……ああいや、上流貴族であるペリオッド家の悪口を言うわけではない。

戦争を遊びだと考える貴族は、この世界にごまんという。俺がペリオッド家に仕えているのは、ご当主様がそういった人間ではなかったからだ。

俺が言いたいのは、ラグテイル様は才能に満ち溢れていたということだからな。

本当に、ラグテイル様に欠点などあつただろうか。

ああ、一度だけ不可解なことがあつたな。ラグテイル様の部屋に、悪臭が漂つてゐることがあつたのだ。原因は不明で、ご当主様は使用人たちを掃除不足だとして叱り飛ばしたそう。本人は笑つて、気にしないようにおっしゃつていたらしい。うむ、これも欠点などとは言えないな。むしろラグテイル様の寛大さを強調するばかりだ。

……ん？

ケ、ケイトン様！ そんな、自ら地べたに落ちたぶどうをお取りになるなんて！ そんなものはこちらに任せておけばよいのに。おやめください、ただいま参りますから！

おいお前、何をぼうつと見ているんだ。とつとと出ていけ。間違つてもケイトン様に話しかけたりするんじゃないぞ！

『クレラへ。』

お帰りなさい。直接出迎えられなくてごめんなさいね。突然だけど、長く書いている時間がないから、本題に入るわ。

あなたが帰ってきたとき、きっと家には誰もいないでしょう。私が重罪人として処刑されるのだから、その家族がのうのうと暮らしていけると思つて？

ごめんなさい。私は身分の高い人と愛し合つてしまいました。だから私は殺されます。私なんか釣り合う人ではなかったから。

何も悔いなどないわ。

私は彼を愛したまま死ぬのだから。

彼を愛した証に死ぬのだから。

私たちが愛し合っているのを、彼の両親も認めざるを得なかったから、私は殺されるのだから。

それにこうすれば、彼はずっと私のことを忘れないでしょう。どんなに素敵な人が現れても、私の存在を忘れることはないでしょう。それでいいの。それだけで十分なの。

彼には彼の人生を生きてほしいのよ。

クレラ、あなたのことは、お父さんの知り合いに頼むそうよ。

そこで私たちの家の者ではなく、その家の者として暮らして。

それと、あなたがラグテイルに会えるとは思わないけど、

もしその姿を見ることができたなら……彼の姿を、私の代わりにその目に焼き付けて頂戴。

それはそれは立派になっていることでしょうね。才能溢れる、美しい人だから。嗚呼、見られないのが残念だわ。

可愛い私の妹。本当にごめんなさい。あなたからすれば本当にひどい姉でしょう。

でも私、あの人を愛せずにはいられなかった。何度も警告されたけれど、それでもあの人が好きだったの。あの人を全てを愛していたの。

置手紙にしたら誰かに持ち去られてしまうかもしれないし、

こうして机にナイフで刻みつけておくしか、確実な方法がなかった。これから私は捕まって、首をはねられるでしょう。

ごめんね。ありがとう。私の妹として生まれてくれて、本当にありがとう。

幸せになってね、クレラ』

うん、僕がケイトンだよ。兄様の話が聞きたいんだね。さっきから聞こえていたよ。

……ああごめん、ラグテイル様を兄様って呼ぶの、癖でさ。小さな頃から呼んできたからね。

ユナさんが処刑された後の兄様について？ そう、僕がずっとおそばにいたよ。兄様が起き上がるまで、ずっとね。

兄様はユナさんの首を持ち上げると、抱きしめなごった。涙を流しながらね。美しい光景だった。僕は思わず、ため息が漏れてしまったよ。

愛する女の首を抱き、清らかな涙を流す兄様。これ以上絵になる光景が存在するわけがない。

兄様が僕の名前を呼ばれたから、僕は兄様の口元まで耳を持つて行った。兄様はか細い声で、こうおっしゃった。

『ケイ、これからわたしは、再生の泉へ彼女を連れて行くと思うんだ。そこでわたしたちは結婚式を挙げたい。協力してくれるかい』

……君も聞いたことあるでしょ？ そう、それ。この国では有名な、おとぎ話。死者の蘇る『再生の泉』

言葉が返せなかった。

だって、実在するわけじゃないじゃないか。そんなもの。

けれどね、兄様は。

本当に、信じていたんだ。

馬鹿みたいに信じていたんだ。

何の逃げでもなく、ただ純粹に。

彼女にまた会えると信じていたんだ。

それだけが彼の生きる理由になったよ。

彼はそれ以外の何も信じちゃいなかった。

だから僕も彼を応援するしかなかったんだ。

僕が応援さえしていれば、兄様はまたこっちを見た。

僕が協力さえしていれば、兄様は笑ってくださったよ。

兄様がまたこっちを見て、僕だけを見てくださるのが、どれだけ嬉しかったことか。君には、わからないだろうね。

それから兄様は、ユナさんの首を持ち帰り、大切に部屋で保存された。掃除のときにはばれないように、巧妙な細工をして、隠しておいたりもした。

ユナさんの頭はだんだんと腐り、腐臭を放つようになる。そ

れでも兄様は、愛おしそうに彼女を見ていた。

日々話しかけてもいたよ。剣術の大会で優秀な成績を収められたことや、自分の立てた作戦が大成功して、土地が増えたこと。自慢げに語っていた。

僕でなく彼女に。

反応もない彼女に。

兄様は『再生の泉』の情報を手に入れるためだけに、進んで各地に遠征し、知識を蓄えていった。

いずれ屋敷から脱走するために、体を鍛え、敵の目をくらませる作戦を学んだ。敵の裏をかく作戦も立て、実験した。

兄様の全ては彼女のためにあつたんだ。

彼女はきつと、初めて兄様を「ペリオッド家の長男」ではなく「ラグテイル」として見てくれたんだよ。

ユナさんは確かに綺麗だったけれど、兄様の異常なほどの執着はそこにあつたんだろうね。

……くだらないと思うかい？

それがいかに尊いことか、君なんかにわかるのかな？

兄様しか僕を「ケイトン」として見てくれる人はいなかった。皆、僕のことを「ラグテイル様の影武者」としか見なかったんだ。兄様は……兄様は唯一僕を認めてくださったんだよ。

五年たったある日、兄様が僕の部屋に駆け込んできた。黄はんだ紙に、茶色の線で地図が描かれていたよ。

やっとな彼の悲願が達成されるときがきたんだ。

君、止められる？ 最愛の人の頭を大切に部屋にしまっておいて、おとき話を完全に信じている人間を？

もうユナさんの頭は腐り落ちているばかりか、白骨化してるんだよ。それでも大切にとっておくんだよ。

おとき話でしかない『再生の泉』なんか信じちゃってさ。

「ケイ、再生の泉の場所がわかったぞ！」なんてさ。あんなきらきらした瞳で言われてごらんよ。何も言えないから。

何で『再生の泉の場所』なんてわかるんだ。わかるもんか。そんなものが実際に存在するわけじゃない。兄様はどこ

かの情報屋に騙されたんだよ。見るからに嘘くさい地図だったもん。でも、大金を積んだんだろうね。兄様の部屋にあつた金貨がごっそりなくなっていたから。

僕？ ……おめでとうって。よかつたね兄様、って。

言うしかないじゃないか。止められるわけじゃないか。

兄様が初めて、僕に、僕だけに嬉しそうに、報告してくれたんだもの。彼女より先に。僕に。この僕に、笑顔で……。

兄様が失踪してしばらく経った後、僕は兄様が見せてくれた地図を記憶の中から引つ張り出して、小さな泉へ行つたよ。

馬の脚でも五日間かかるところだった。

いやあ、笑っちゃつたよ。

ただの泉なんでもん。

緑色に濁つた、本当にただの小さな泉。

それでも兄様が信じた『結婚式場』さ。この国では結婚式で、花嫁に帽子を被せるのは知っているだろう？

他の国ではヴェールとかいうものを被せるみたいだけどね。

泉にはね、その帽子と、兄様の軍帽が仲良く並んで浮いてたんだ。兄様の体は浮いてなかったよ。兄様つたら、あんなに重い軍服で出かけるんだもの。

そりゃあ、結婚式だからね。正装で行くよね。

兄様は沈んでいった。

きっとユナさんに会えるのが待ち遠しかったんだよ。

死ぬつもりなんてなかったんだろうね。だつてどうすれば人が死ぬかなんて、彼にはわかつてなかったからさ。

兄様が泣いていたのは、ユナさんに痛い思いをさせてしまったからにすぎなかったんだよ。

……彼は無邪気すぎたんだ。

どうしたの。今にも死んでしまいそうな顔をしているね。

ねえ、ここまで聞いたんだからさ、答えてほしいことがあるんだ。そんなにおびえないで。

大丈夫だから。僕は君に危害を加えたりしないさ。

そんなことしたら兄様が悲しむもの。

ねえ。

何が悲劇なんだと思う。

彼らは幸せに死んだよ。

幸せか。

死しあ逢あわせとはよく言ったものだね。

ねえ。

僕と君。

兄様とユナさん。

誰が悲劇の主人公なんだと思う。